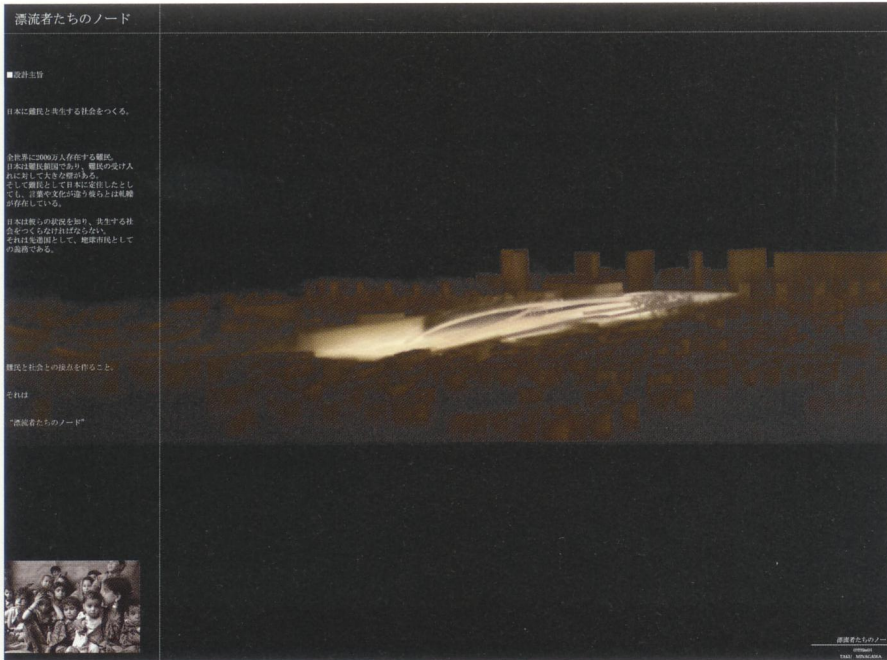


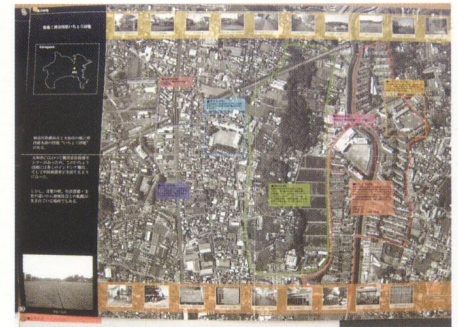
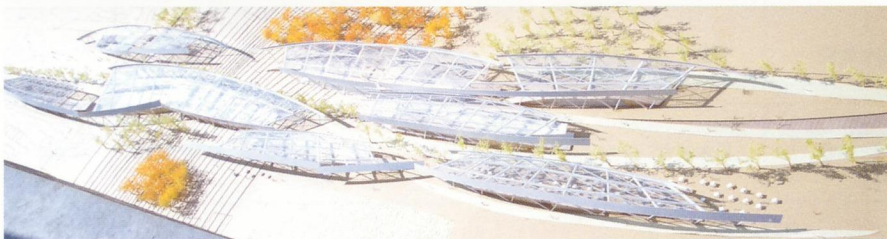
漂流者たちのノード

皆川 拓 (みながわたく)

千葉大学 工学部デザイン工学科



日本に難民と共生する社会をつくる。
 30年前、日本にボートピープルとしてたどり着いたインドシナ難民。
 しかし、もともと話す言葉も文化も違う彼らと地域社会との間には軋轢が生じている。
 僕は彼らのことを知り、共生する社会をつくらなければならない。
 敷地は神奈川県いちょう団地。ここには多くのインドシナ難民が生活している。
 団地内に閉じこもりがちな外国人コミュニティと、地域社会をつなげるために、700m×80mの大きな道を計画した。
 それは地域社会にとっての道であり、公園であり、異文化と接する場である。
 難民が社会との接点を持つこと。
 それは“漂流者たちのノード”



【講評】 左隅の小さな写真、東南アジアの子供たちが何かに怯えるような表情の……。
 漆黒のパネルで始まるプレゼンテーションは、流れるように美しいフォルムの模型との対比で強いメッセージを發し、見る人の想像力を沸き立てる。作者がカンボジア旅行で感じ取った貧しい人々への思いから、かつて日本が抱え、今では忘れられた東南アジア難民という社会問題をテーマに卒業設計に取り組もうとした姿勢にまず感銘を受ける。建築の社会性——「機能や芸術性を超えて建築が社会に対して何ができるか」という私達建築家が問われる今日的課題に、学生である作者が真っ向から取り組み、持てる力を振り絞って表現した力作である。大和市「いちょう団地」という現実にこの問題を抱える

地域を取り上げて、綿密な調査に基づき導き出したプログラム——「地域との交流の仕組み」は既存の学校や地域特性を活かしながら団地と市街をつなごうとする意図が明確に表現されている。「交流を生み出す仕掛け」としての建築は、生活・文化・交流と様々な機能を持つ施設群が団地から中心市街へのヒエラルキーに従って巧みに配置され、行き来する人々が様々なアクティビティに触発されて自然に引き込まれるような「路の建築」として提案されている。
 社会への真摯なまなざしと建築への熱い思いを美しいプランとフォルムで表現した作者に、将来の期待を込めて最大の称賛を送りたい。
 【審査員：柳田富士男】